

# 女性雑誌の民俗学的考察

——『それいゆ』読者のライフストーリーを事例に——

An Ethnographic Study of Woman's Magazine Theory  
A Case Study of the Life Stories of "Soreiyu" Readers

廣江 咲奈

キーワード：女性雑誌，憧れ，『それいゆ』，中原淳一，ライフストーリー

This paper attempts to clarify how girls read magazines in the age of Western dressmaking culture, based on the life stories of readers of the woman's magazine *Soreil*, which Junichi Nakahara launched after the end of Pacific War. Junichi Nakahara is known as one of the pioneers of girls' culture. Until now, the readers' column of girls' magazines have been treated as one of the most important research materials. Although reader viewpoints have been important in research on girls and women's magazines, girls and women have rarely been interviewed. To address the absence of readers' voices, this paper uses the method of life stories to reveal through readers' narratives examples of how magazines were read.

Nakahara was once an illustrator and a designer who played an active prewar part in publishing a girls' magazine, *Shojo no Tomo (Girls' Friend)*. The interviewee for this study was born in 1944 and spent her childhood in Shibuya, Tokyo, where from 1955 to 1960 she loved to read *Soreil*. Three interviews with her revealed episodes of poverty that she witnessed in her school life, how she used to read the magazine from cover to cover,

how she longed for the skirts introduced in the magazine, and then tried to have them made.

As a result of this survey, the influence of yearning inspired by the magazines became clear. Among the women interviewed, “yearning” was included as the first reason for buying magazines. This is probably because the magazines have pictures and articles that are practical and familiar to readers. Yearning is also thought to have the effect of sustaining memory. The interviewee remembered reading only *Soreil* even though she had read other magazines and books.

## 目次

### はじめに

#### I 先行研究と本稿における目的

- 1 先行研究の整理
- 2 本稿における目的と研究方法

#### II 少女雑誌と中原淳一の戦前戦後

- 1 少女雑誌の歴史と中原淳一
- 2 婦人誌『それいゆ』とその時代

#### III 調査概要

- 1 話者と調査の概要
- 2 語りの内容

#### IV 雑誌は少女にどう読まれていたか

- 1 雑誌における憧れと生活
- 2 雑誌研究における聞き取りの有用性

### おわりに

## はじめに

日本における雑誌の誕生は慶應3年（1867）に創刊された『西洋雑誌』といわれる。明治期に入り、機関誌をはじめとする啓蒙雑誌や、小学生を対象にした子ども投書雑誌などの創刊が相次ぐなかで、婦人や少女をターゲットとする雑誌が現れた。

明治期に創刊された少女雑誌および婦人雑誌は、戦後には今日のファッション雑誌や少女まんが雑誌として発展を遂げる。戦前の少女雑誌や婦人雑誌は、文化の普及および発展に寄与し、読者が自身のアイデンティティを自覚する場としても機能した。これらは、先行研究においても論点として取り上げられているところである。では、文化やアイデンティティを分節する場になった雑誌を女性たちはどのように読み、何を感じていたのだろうか。読者が雑誌をどう読み、捉えていたかという関心は、従来の研究でもほとんど深められてこなかった。

本稿では、少女雑誌および婦人雑誌がファッション雑誌へと変貌する転換期に発行された婦人雑誌の一つ『それいゆ』の愛読者のライフストーリーを通して、1950年代の少女たちはどのような環境下でどのように雑誌を読んでいたのかについて考察する。

第1章では、少女研究及びその派生である少女雑誌研究に触れ、少女がどのようにに着目され、研究されてきたかを整理する。また、取り上げる『それいゆ』が婦人雑誌であることから、婦人雑誌研究にも触れ、女性雑誌研究全体における問題の所在を明らかにしたい。第2章では、少女雑誌の歴史と、『それいゆ』を発刊した中原淳一<sup>1)</sup>の少女雑誌およびファッション業界における活躍について整理する。この作業によって、戦前戦後の時代背景および中原が当時の社会に与えた影響を明らかにする。第3章では、調査報告として、婦人雑誌の読書経験の事例を示す。第4章では、事例の分析を通して、先行する議論に批判的検討を加える。

以上の作業から、戦後経済成長を遂げた日本において、女性雑誌はどのよ

うに読まれていたのかの一考察を示すと共に、雑誌研究における聞き取りの可能性を提示する。

## 第1章 先行研究と本稿における目的

### (1) 先行研究の整理

本稿の話者が愛読していた『それいゆ』は前述したように婦人雑誌ではあるが、少女の読書体験の様態への関心から、話者の語りを分析する。以下、若年女性を研究の対象としてきた少女論の研究史をおさえておきたい。なお、少女論の文脈における「少女」とは、今田絵里香によると、「高等女学校などの学校教育制度によって生み出され、少女雑誌などのメディアによって具体的なイメージを付与された」存在とされている〔今田 2007: 2〕。今田の定義にもみられるように「少女」論における「少女」は、明治期の女学生を指すことが多いが、本稿では、主に学校に通う未婚の女性を「少女」の対象として取り扱うこととする。

少女研究の嚆矢は、本田和子が昭和 57 年（1982）に上梓した「ひらひらの系譜」及び「『少女』の誕生」とされる〔本田 1982〕。この論稿を皮切りに、社会的に重要視されにくかった少女という存在が多くの研究で取り扱われるようになった。

少女論のなかでは、少女を読者として想定し、発刊される雑誌が主要な研究対象として扱われてきた。そもそも、少女という表象は学校教育により発生し、少女雑誌によりイメージづけがなされたとされている。本田も平成 2 年（1990）上梓の『女学生の系譜』において、想像の共同体である「少女幻想共同体」が少女雑誌上でペンネームを用いて作りあげられることを明らかにした〔本田 2012: 137〕。これ以降、少女雑誌を素材とした議論も隆盛していく。例えば、佐藤（佐久間）りかは、明治 35 年（1902）創刊の『少女界』を題材に、本田が「消極的な形での主体性」<sup>2)</sup>として捉えた「少女幻想共同体」を、交流の相手を求める主体的少女と管理しようとする側の「ネゴシエーションの産物」とした〔佐藤（佐久間）1996: 116-117、139〕。ま

た、少女雑誌において、剽窃や少女以外の投稿、他誌との重複する投稿者に対して厳しい態度を持ち、「清き誌上」を求めたことが明らかとされている〔佐藤（佐久間）1996：125-131〕。

川村邦光や嵯峨景子は、明治から大正期に発行されていた『女学世界』の読者投稿欄に分析を加えている。川村は『女学世界』において特定の文体を用いて投稿欄に関わり合う「オトメ共同体」なるものの存在を明らかにしている〔川村 1995：112〕。嵯峨は、川村の議論を引継ぎ、歴史的な分析から「オトメ共同体」設立の背景として、女学生文化の発展や婦人雑誌の台頭による主婦層の流出によって『女学世界』の読者層が絞り込まれたことを明らかにした〔嵯峨 2011：145-146〕。

今田は、戦前に都市の女学生を中心に読まれた『少女の友』の投稿欄を分析し、本田や川村のいう実態の伴わない共同体と異なり、文芸を媒介に強固に結びついた共同体の存在を明らかにし、「少女ネットワーク」と名付け、共同体の仲間意識を高めるために構築された「少女らしさ」の存在を明らかにした〔今田 2002：185-192〕。

研究対象としての少女雑誌は、その刊行が始まった明治期から昭和の戦前期まで幅広く扱われる。少女雑誌を対象とした研究には、投稿欄に着目したものほかに少女小説や広告といった表象の分析などにも蓄積がみられる〔藤本 2006；小出 2011〕。

先行研究において、雑誌投稿欄は当時の少女の生の声を拾い上げることが出来る資料として重視されてきた。これは、リカちゃん人形や少女雑誌など「少女らしいもの」を提供する側ではなく、その受け手側の少女の姿を重視するがゆえであろう。

戦後の少女雑誌研究においてもその傾向は強い。例えば、田中卓也は戦後の少女雑誌『女学生の友』を題材にして、投稿欄を媒介に関わり合う少女たちの関係を指摘し、菊田琢也は、少女雑誌『オリブ』を題材に読者投稿ページから昭和後期の少女像の形成を明らかにしている〔田中 2013, 2020；菊田 2013〕。

ここまで、少女論およびその派生である少女雑誌論の研究史を整理してき

た。これらの蓄積における課題は、雑誌の読者としての少女の姿を明らかにしようとするとき、雑誌の読者投稿欄のみに注目するだけでは不十分であるということであろう。なぜならば、多数派であろうと想定される、雑誌に投稿をしない読者や購入はできない又はしないものの、何らかの形で同誌に触れる読者の存在を捉えきれない可能性がある。また、雑誌に関わる共同体は誌面を介した繋がりに留まらないものもあると考えられるが、既存のアプローチのもとでは、実際に存在したであろう読者の範囲を狭めてしまう恐れがある。少女雑誌読者の実際の経験を記録し、考察することで、雑誌という紙資料のみでは捉えきれない読まれ方を把握する必要があるのではないか。

他方で、婦人雑誌研究においては、読者投稿欄よりも記事分析の蓄積が厚い。例えば、明治20年代から明治40年代までの婦人雑誌の記事分析から、家族団らんが大衆化し、戦時下の影響で衰退する過程を明らかにしたものや、新聞や婦人雑誌からモンペの普及及びその流行を明らかにしたものなどがある〔表2006：369-378；枝木2019：15-24〕。読者が投稿する記事である実話記事を分析したものもあるが、少女雑誌研究のように投稿欄による繋がりを意識したものではなく、時代背景を読み解く資料として実話記事が用いられている〔笹本1987〕。現代を対象にした研究にも同様の傾向がみとれる〔米澤2014〕。

ただし、婦人雑誌研究においては、読者へのインタビューを行う動きもみられる。四方由美はメディアの一つである雑誌の研究における課題として受け手の享受層を明らかにすることをあげ、ライフストーリー法を解決の方法として提案している〔四方2007：1-11〕。なお、四方の議論は研究手法の検討を主とするものであり、調査の一部を実例として紹介するに留まっている。雑誌読者への聞き取りとしては、良妻賢母教育とマスメディアの関係へのアプローチを試みた木村涼子の成果も存在する〔木村2021：63-74〕。

婦人雑誌研究では、聞き取り調査も行われ始めており、受け手像を明らかにする有効な手段として評価されている。しかし、聞書きの中心に置かれているのは昭和初期における学校での経験〔木村2021：63-74〕であり、雑誌を中心とした聞書きは行われていない。つまり、日常のなかで読まれていた雑誌を中心とした具体的な分析には至っていないということである。そし

て、日々の生活のなかでこうした雑誌がいかにか読まれていたかという点こそ、民俗学の関心の対象であるといえよう。

少女雑誌と婦人雑誌は、想定される読者は異なるものの、メディアの形態は同一とみなせる。今回取り上げる話者は、少女時代に婦人雑誌を読んでおり、また、雑誌を介した繋がりにも参加していなかったという。読者に聞書きを行い、生活と雑誌の関わりを記すことは、少女雑誌や婦人雑誌の読者を理解するうえで、重要な意味を持つのではないかと筆者は考える。

## （２）本稿における目的と研究方法

前節では、先行研究における課題として女性雑誌の読者の範囲を狭く定義しかねない点を指摘し、その克服に実際の読者の声を記録する重要性があると述べた。本節では、本稿における目的と研究方法を示す。

前節でも指摘したように、少女雑誌の研究は近現代の雑誌を対象にしたものであっても、雑誌という紙媒体に書かれている情報の収集及び分析に留まり、実際の読者の生の声には検討が及んでいない。読者が存命である場合も少なくない昭和以降の少女雑誌に関しても、図録や雑誌記念号などにインタビューや座談会といった形式での記録は残っているが、先行研究の手法は近代の雑誌を扱う際とほぼ変化していない<sup>3)</sup>。雑誌にどのようなことが書かれていたのか、投稿されていたのかを明らかにするのは、その雑誌が流通した時代を把握するうえで大変重要である。しかし、それと同時にどのような人に、どのように読まれていたか考察する必要もあると筆者は考える。なぜなら、雑誌は読者がいてこそ成立するものであり、読者の価値観に少なからず影響を及ぼしもするからである。したがって、生活における雑誌の読まれ方の検討は、民俗学の関心においても重要な意義を持つ。

また、高等女学校に通う女学生向けの雑誌として端を発した少女雑誌及び既婚女性を対象として発行されてきた女性婦人雑誌は、明治から昭和にかけて少女まんが雑誌、ファッション雑誌へと発展していく。婦人雑誌『それいゆ』および少女雑誌『ジュニアそれいゆ』は、少女雑誌・婦人雑誌がファッション誌へと変貌を遂げる転換点といわれ、その発刊者である中原淳一は、

「少女に向けたメディアそのもの」を作った人物とも言われる〔井上 2013: 88〕。女性雑誌の歴史の中でも重要な意味を持つこの雑誌は、生活の中でどのように読まれていたのであろうか。雑誌内に掲載される読者の声でなく、実際の読者体験を記録し、分析を加えることは、雑誌の転換点を捉えるのにも意義を持つであろう。

次に、本稿における研究方法を明らかにする。本稿では、元読者の語りから、婦人雑誌『それいゆ』がどのように読まれていたかを明らかにしたいと考える。これは話者の立場の特異性からである。話者は、人生のなかで、唯一記憶に残っている雑誌が『それいゆ』であるといい、これに関わるエピソードを所持している。本稿における目的は、雑誌研究のなかで十分でない読者への聞き書きを通して、生活のなかで雑誌がどう読まれていたかを把握することである。そのための方法として、筆者はライフストーリー法を選択する。

桜井厚によると、ライフストーリーとは個人のライフ（人生、生涯、生活、生き方）に焦点をあわせ「生活世界や社会、文化の諸相や変動を全体的に読み解こうとする質的調査法の一つ」である〔桜井 2012: 6, 9〕。メディア史研究においては、先述のように、四方がライフストーリー法の可能性を検討している〔四方 2007: 1-11〕。同方法について、四方は語り手の特質や経験を分析する研究者側が行う配慮の必要性をあげつつも、ライフストーリー法は「その経験が何であったのかを知るという方法」であり、婦人雑誌研究の読者経験を考察するのに最も適した方法だとしている〔四方 2007: 9〕。本稿で取り上げる話者は、自身が生きた時代やその記憶を自身で評価づけている。雑誌に焦点を充てたライフストーリーの把握は、本稿の目的としてもっとも妥当であろう。

以上、本節では、先行研究をふまえ本稿における目的と方法を示した。目的は、雑誌の元読者への聞き書きを通して生活における雑誌の読まれ方の把握である。そのための方法として、個人の語りを通して生活世界を読み解くライフストーリー法を採用する。次章では、本稿の話者が愛読していた『それいゆ』の背景として雑誌の性質および、その編集者である中原淳一の活動を整理する。



## 第2章 少女雑誌と中原淳一の戦前戦後

### (1) 少女雑誌の歴史と中原淳一

前章では、先行研究を整理し、ライフストーリー法から読者経験を明らかにする本稿の目的を示した。本章では、話者の読書経験の背景理解のため、少女雑誌の大まかな歴史と、『それいゆ』の編集者である中原淳一と少女雑誌の関係を整理する。中原は、少女雑誌『少女の友』から挿絵画家としてのキャリアを始めた人物である。少女雑誌は歴史においてどのように発生し、また中原は、少女雑誌にどう関わっていたのかを整理していきたい。

今田によると、少女は明治23年(1890)以降に自称としての用法がみられるようになった言葉だという。これは、明治12年(1879)に制定された教育令に関係があると考えられている。教育令によって、男女別学が明文化された。このことから、元々男女どちらも指す「少年」という言葉から女性が分化し、「少女」が誕生したという[今田 2007: 53-54]。

明治期の教育令で学校が分化したのに伴い、子ども向け雑誌もジェンダー分化した。少女雑誌の誕生である。少女雑誌は、明治35年(1902)創刊の『少女界』を皮切りに相次いで発刊された。これらは、はじめ少女に少女らしさを示す規範としての役割を期待されたものでもあった。

数多く発刊される少女雑誌のなかで、当時の都市部の少女たちに人気を得たのが『少女の友』である。同誌は、明治41年(1908)から昭和30年(1955)まで実業之日本社から刊行され、日本の少女雑誌で最も長い歴史をもつ。その中でも、昭和7年(1932)6月号から『少女の友』の挿絵を手掛けた中原は当時の読者たちから絶大な支持を得ており、その人気ぶりは昭和10年(1935)から5年間表紙絵を務めるほどであった[遠藤・内田 2009: 368-369]。『それいゆ』創刊100周年を記念して平成20年(2008)に開催された「友チャン同窓会」でも、同窓会参加者が、「友チャン会」で歌われていた『夢の花』<sup>4)</sup>を全員で歌ったり、当時の付録を箱に入れて保存していたりと、読者の熱狂ぶりを伺うことができる[遠藤・内田 2009: 280-282]。また、当

時の新聞をみても、『少女の友』は中原淳一と松本かつちのイラストや付録の豪華さから「一般雑誌界一等」と評価を受けるほどであり、少女たちからの人気だけでなく周囲の評価もかなり高い雑誌であったといえる〔朝日新聞 1936 年 12 月 25 日〕。

しかしながら、戦況が厳しくなった昭和 15 年（1940）、中原は軍部の圧力から『少女の友』降板を余儀なくされた。これは、中原の絵柄が世情にふさわしくないという理由によるものである。中原の絵に描かれる少女は、扇情的な目にどこか弱々しい姿であった。また、中原が雑誌の専属挿絵画家となる前にフランス人形を作成していた経験の影響か、和装でなく洋装で、どこか外国風の雰囲気を持ったことも原因として考えられる。

中原が『それいゆ』から降板するという発表には、読者から惜しむ声が続出した。当時の『少女の友』読者の 1 人である小説家の田辺聖子も『欲しがりません勝つまでは 私の終戦まで』という自伝エッセイの中で中原の絵が消えたことに対し、「火が消えたような気がした。中原淳一の絵のない『少女の友』も少女小説も、空しくて生気がぬけた」〔田辺 1981：61〕と記し、ショッキングな出来事として記している。『少女の友』の主筆、編集長を務めていた内山基も『少女の友』の「クラブ室便り」において「中原さんの畫が少女の友から無くなりました。きつと多くの方が寂しくお思ひになり、失望なすつたことと思ひます、失望と寂しさは僕達も決して皆さんに劣らないのです」と語る〔内山 1940：244〕。中原の影響力が大きなものであったことが知れよう。

本節では、少女雑誌の発刊の歴史を俯瞰してきた。少女雑誌の中でも人気少女雑誌のひとつであった『少女の友』をとりあげ、挿絵画家を務めていた中原の影響の程度を検討した。前章でも触れたとおり、中原は戦争が終わるとすぐに婦人雑誌『それいゆ』を発刊する。中原が戦後発刊した『それいゆ』とはどのような雑誌で、どのような背景をもとにして発刊されたのだろうか。

## （2）婦人雑誌『それいゆ』とその時代

中原は昭和 21 年（1946）にヒマワリ社（後にひまわり社へと変更）を設立した。『それいゆ』は同社により、戦後直後の昭和 21 年（1946）に創刊され

た婦人雑誌である。中原は、創刊の背景について「戦後すべてが貧困で、夢をまったく忘れた女性に、それを補うような雑誌があったらと思って作った」と述べている〔内田 2011：84〕。このとき、主に少女雑誌で活躍していた中原が婦人雑誌を作ったのは、戦前の少女雑誌読者に向け作成したからである。戦前の少女雑誌読者であった少女たちは、結婚し若妻になっていた。中原はそのような元少女雑誌愛読者を念頭に置いて、婦人雑誌を作成したのである。中原は「よき女性の人生はよき少女時代を送った人に与えられる」との考えから、昭和 22 年（1947）に少女雑誌『ひまわり』を創刊した。『それいゆ』が、『少女の友』の時代によき少女時代を送ったよき女性のために作成され、『ひまわり』はよき女性となる前の少女のために作られたと言えよう。『ひまわり』は、昭和 27 年（1952）に廃刊してしまうが、翌年にはその後継雑誌である『ジュニアそれいゆ』が創刊される。このことから中原が、少女に向けたメッセージを届けることに情熱を持ち、行動していたことがわかる。

『それいゆ』の記事構成はどのようなものだったのだろうか。「それいゆばたん」という中原が季節に合わせたイラストを描き、服装の色や形の組み合わせを記したものがある。『それいゆ』で取り扱う内容は、ファッションの他に、評論や小説、音楽や美術といった芸術案内、インテリアや料理、生き方や日常のマナーなど幅広く取り扱われているという〔小山 2013：104-105〕。執筆には中原のほかにイラストレーターの内藤瑠根や雑誌編集者だけでなくアナウンサーとしても活躍した片山龍二、現在でも続く NHK の料理番組「みんなの料理」で講師役を務めた料理研究家の飯田深雪などが関わっていた。

中原が少女向けに描くイラストおよび少女雑誌で勧めるものと、婦人向けに描くイラストおよび勧める衣服とは違いがあるという。婦人雑誌『それいゆ』と少女雑誌『ひまわり』の表象を比較した谷岡輝樂々によれば、『それいゆ』ではフランス風のファッションが取り上げられていたのに対して、『ひまわり』ではアメリカ風のファッションを取り入れていたという。『ひまわり』で表象される少女らしいデザインとは、丸みを帯び、襟の詰まった首元、丈の短いフレアスカート、そして小物を使用しないスタイルのことである〔谷岡 2019〕。つまり、中原は少女向けのものと婦人向けのものに意識的に書き

分けを行っていた。少女雑誌における中原の影響力は前節で触れたとおりであるが、他には、「少女雑誌」と「戦後のファッション誌」をつなぐ存在であるという評価〔井上 2013：88〕や、少女まんが家の誕生に関連したという評価〔岩下 2013：195-202〕などとも言われている。また、中原は発刊したすべての雑誌に料理のページを設けており、食卓洋風化を牽引したうちの1人でもあるという〔福田 2013：127-131〕。

本章では、少女雑誌の歴史とその歴史における中原淳一の位置について整理を加えた。中原は、『少女の友』や戦後自身が中心となって出版した『それいゆ』や『ひまわり』、『ジュニアそれいゆ』を通して、戦前および戦後の少女たちを中心に広範囲に影響を及ぼしたことが指摘される。そのような中原の雑誌は個々の読者にはどのように経験されたのだろうか。

### 第3章 調査概要

#### （1）話者と調査の概要

前章では、今回取り上げる婦人雑誌『それいゆ』の創刊者である中原淳一と『それいゆ』が創刊された時代的背景および中原の持つ影響の大きさについて述べた。本節では、本稿の話者について概要を整理する。話者・A氏は、令和2年（2020）、筆者が学士卒業論文執筆時に調査に伺った、東京都あきる野市の私設図書館「少女まんが館」の紹介で面識を得た。

A氏は昭和19年（1944）5月20日、東京都渋谷区生まれの女性である。A氏は、昭和26年（1951）に地元の公立小学校である西原小学校に入学する。昭和35年（1961）からは私立の鷗友学園に通う。鷗友学園とは、東京都世田谷区にある私立の女子中高一貫校で、A氏は昭和38年（1963）に高校を卒業するまでの6年間を過ごした。同年に私立のフェリス女学院短期大学英文科に入学する。『それいゆ』は小学校5年生から中学校3年生の頃までの約5年間、定期購読していたそうである。時期としては昭和30年（1955）頃から昭和35年（1961）頃までと考えられる。昭和40年（1965）に大学を卒業してから約2年間は専門学校の事務の仕事をしていたという。しかし、A氏が

大学を卒業する頃には、現在の結婚についてある程度予想がついていたそうである。昭和 43 年（1968）年に現在の夫と結婚した。結婚後は、夫の仕事の影響で帯広や大阪、佐賀など全国を転々としたという。夫が定年退職をしてからようやく神奈川県に定住するようになった。実家のある東京都渋谷区も近いので、訪問することもあるという。

A 氏の語りを取り上げる理由は以下の 3 点である。まず一つ目に、A 氏が戦後の急激な経済成長と社会の変化を少女時代に経験したことがある。この時期には日本人の生活が大きく変化した。雑誌の出版ブームが起こっただけでなく、服飾史においても洋裁学校の設立が相次いだとされる〔井上 2011：9-11〕。洋裁学校の設立は、第二次世界大戦後に起こったといわれる洋裁ブームとの関連への指摘がある〔井上 2010〕。女性雑誌は洋裁ブームにおいても影響を持っていたとされ、読物や投稿が中心であった女性雑誌がファッション誌へ転換するこの時期の読書経験は、民俗学の立場から服飾史を考える上でも大きな意味をもつであろう。二つ目は、刊行を終了する昭和 35 年（1960）頃まで『それいゆ』を継続的に読んでいた読者であるからである。雑誌を定期購読した経験は、時間の経過に伴う雑誌と話者との関係理解に重要であると考ええる。三つ目は、A 氏が小学校 5 年生から中学校 3 年生までの「少女」の期間に『それいゆ』を読んでいたことにある。少女雑誌における共同体は、ターゲット層以外の読者が排除するものであった〔佐藤（佐久間）1996：122-125〕。そのような雑誌の共同体における排除性を考慮した際、A 氏は既存の研究の方法では少女として扱うのが難しい例といえる。

なお、A 氏へのインタビューはすべて Web 会議サービス Zoom を用い、令和 2 年（2020）11 月 1 日、令和 3 年（2021）8 月 26 日、令和 3 年（2021）10 月 6 日の計 3 回実施した。

## （2）語りの内容

本節では調査により得られた語りを記し、雑誌が生活の中でどのように読まれていたかを考察する。まず、第 1 回目調査、第 2 回目調査、第 3 回目調査のそれぞれにおける話題の流れを紹介した後、筆者が特に注目したい雑誌

と衣服、当時の社会状況に関する語りに検討を加える。

第1回目調査では、『それいゆ』を読んでいた時期の思い出と、豊かになる周囲の状況について感じたこと、やがて『それいゆ』を読まなくなり、手放してしまったこと、しかし、そのあとも唯一記憶に残っている雑誌であること、またそれについてのA氏なりの見解が語られた。第2回目調査では、少女時代に雑誌の廻し読みをしていた友人との間柄や、現在の小学校時代の友人との付き合いなどを語ってもらった。第3回目調査では、第1回目・第2回目の語りの事実確認をA氏が少女時代に目にしたであろう画像などを用いて行った。

以上をふまえ、計3回のインタビューを通して得られた語りの中から、A氏がどのように雑誌を経験し、評価づけているのかを示していく。

A氏は、小学校5年生の頃から『それいゆ』を読み始めた。A氏が小学校の頃は、二部授業の頃でもあった。『それいゆ』を読み始める前の、小学校2年生くらいまでは、教室や先生が足りず、午前と午後で授業を分けて行っていたという。少なくとも算数と国語の授業では、授業についていけない人を先生が残して、勉強を見てくれることもあったそうである。休み時間は校庭で遊ぶことが多く、だいたい縄跳びかドッジボールをしたという。小学校の遊びで、縄跳びの縄をランドセルに縛り付けて持って行って良いかどうかを学校で議論した覚えがあるという。学校から帰宅すると、荷物を一度置いてから校庭に集まり遊ぶことが多かったそうである。習い事に日本舞踊をしていたという。6歳の頃から中学校3年生まで、母親の知り合いと一緒に教室に通っていた。日本舞踊をやるようになったきっかけは、親がやっていたからだそうである。

A氏が『それいゆ』を読み始めたきっかけは、小学校5年生の頃に当時の小学校の同級生が読んでおり、それを貸してもらったからであるという。始めは、同級生である友人から借りて読んでいたが、自分でも欲しくなり、親にねだって本屋の定期講読を取ってもらった。きっかけになった友人は、小学校5年生の頃に仲の良かった同じクラスで近所に住んでいたという友人5、6人のことを指し、互いの誕生日に家を訪れ、誕生日会をするような間柄で

あったという。A氏が初めて『それいゆ』を借りたときは、自身のあとに読む予約待ちの友人もあり、大切に読んで大切に廻したという。

小学校の頃に行っていた誕生日会は、それぞれの自宅ですることが多かったという。A氏の母は誕生日会にちらし寿司を作ることが多かった。また、現在は、誕生日にケーキを食べる習慣があるが、A氏が小学生だった頃は日持ちがするクリームがなく、バタークリームのケーキであったそうである。生クリームが入ったケーキは、A氏が高等学校を卒業する頃あたりに販売が始まった記憶があり、大学に入る頃には生クリームのケーキが主流になっていったという。

A氏は『それいゆ』を定期購読するようになった理由を「友人たちが読んでいたのと表紙に惹かれたからだと思う」と語った。A氏によれば、小学5年生だった当時、中原の描く表紙のイラストは多くの人々を惹きつける「憧れ」の対象であり、当時の少女たちに人気の浅丘ルリ子<sup>5)</sup>が主演し流行した『緑はるかに』という映画のイメージとも合っていたのだという。中原の描く顔には一つのパターンがあるので、A氏の年代の女性であれば、中原のイラストを見覚えがあるのではないかと語る。

A氏の語りの中で当時の流行として語られる映画『緑はるかに』は、昭和30年（1955）に日活から配給された映画作品である。A氏はこの映画のイメージと中原のイラストのイメージが合ったのだという。同作品の浅丘ルリ子の服装は、スカートの形状や詰まった襟のブラウスに中原の描くイラストとの相似を見出すことが出来る。同映画の原作は昭和30年代に読売新聞で連載されていた北条誠の小説であり、中原は挿絵を担当していた。また、映画『緑はるかに』の衣装も中原が担当し、浅丘と話し合って衣装を決めていったことが紹介されている<sup>6)</sup>。

話者が『それいゆ』に見出していた魅力は、中原の演出する世界観にあったといえようが、とりわけ、それは衣服への関心と重なっていたようである。A氏は、『それいゆ』に掲載されている記事のなかで最も関心があったのはファッションに関するものであったと語る。少女時代に流行した「落下傘のようなスカート」は『それいゆ』から広まった記憶があり、自身も『それい



ゆ』に掲載される内容に憧れて母親にねだったそうである。また、母親にねだって『それいゆ』に掲載される型紙を基に作ってもらうも、完成したものが自身の想像と異なりすねたとも語る。このように、雑誌の読書体験は衣服への憧れを導き、またそれを実際に手にしたいと願われていた。

A氏が言う「落下傘のようなスカート」とは、『それいゆ』にみられる、いわゆる落下傘スカートと呼ばれるもので、パニエやペチコートなどでスカートの膨らみを固定したものである。ここで語られるペチコートは、スカートの形状を張らせるためのものであり、落下傘スカートを着る際にも用いられるもののことを指す。A氏の記憶において、『それいゆ』は、ファッションとの関連において強く記憶されているといえよう。また、「落下傘のようなスカート」はA氏の語りの中に頻繁に登場する。

落下傘スカートのほか、A氏は、コルセットに関するエピソードから当時のファッションへの関心の高さを語る。自身の最たる関心であった衣服は、当時の多くの人びとにとっても関心事だったという。A氏は、彼女が少女時代を過ごした時代は20歳を過ぎると、コルセットをするのが日常的なことであり、それほどにファッションに気をつかう人が多かったそうである。A氏は、近年の若者はゆったりした服を着る傾向にあると理解しているようであり、自身が少女であった頃と比較してファッションへの関心に大きな差があると考えている。A氏が少女であった頃は、潤沢に物がなかったオシャレをする時代であり、そのために窮屈でもオシャレを優先していたのだという。ちなみに、A氏の記憶では、日本でミニスカートが流行したのは、結婚後だったといい、学生の頃にミニスカートが流行った記憶はないそうである。

A氏が雑誌を読んでいた昭和30年（1955）頃から昭和35年（1960）頃の時期は、洋裁ブームの時期にあたる。洋裁ブームに関連してA氏自身も、小田急線沿いに田中絹代服飾学院を設立した田中絹代の名をあげている。当時は洋服を作る技術としての洋裁が女性に望ましい教養となされていた。その流れのなかで、落下傘スカートも、雑誌の型紙などを参考にして作成することが可能であった。A氏は、そのような憧れのファッションが載る雑誌の流通する時代を「貧しさはあまりなかった」と評価する。経済状況が良くなっ



ていくことに対しても、小学校5、6年生の頃に話者宅に洗濯機が入った記憶を語り、「右肩上がり」の時代だったと繰り返し振り返っている。しかしながら、当時の経済状況が全ての人びとにおいて「右肩上がり」ではなかったことも認識している。A氏は、その経験を小学校時の給食費のエピソードを用いて語った。A氏が小学生だった時代、給食費は紙封筒に入れて先生に渡す方式であったという。月の給食費は200円から300円くらいであり、50名近いクラスの生徒のうち、3分の1くらいの生徒が給食費を払えていなかったそうである。A氏は、給食費を払えないクラスメイトがいたことは、社会が持っていた貧しさのようなものであり、全員が右肩上がりの波に乗っていなかったからだと語る。経済成長のなかにあつて、『それいゆ』といった婦人雑誌が販売される時代でも、日々の学校生活のなかで戦後の厳しさを感じていた。

A氏の給食費の語りは、当時の『それいゆ』の価格が180円であったことを伝える筆者の問いかけに呼応して語られたものである。『それいゆ』の価格は、「代々木八幡からバスに乗って渋谷に出るバスが20円」の時代には、高額であったという。『それいゆ』は隔月雑誌で2ヶ月に1回の発刊でこそあったが、当時の子どもたちには高額であり、A氏は「180円っていうのはどんな子でも買ってもらえるあれじゃない」と当時の経済格差についても言及する。

また、この頃には学校単位でのおさぎりの仕組みがあったという。現在でも、友人同士で学校の制服や鞆をおさがりとして譲ることがあるだろうが、A氏が小学生だった頃にも、年上の兄弟姉妹がいる生徒はその上の兄弟からおさがりをしてもらうことがあった。それに加えて、卒業した生徒が教科書やランドセルを学校に置いていき、そのおさぎりを新入生が使うということも存在したそうである。

A氏の語りからは、豊かになりつつある時代のなかで、一部には社会の厳しさや貧しさが残されており、A氏は少女時代に生活のなかでその両面を感じていたことが判明する。話者にとっての『それいゆ』は、実際的な生活の必要や、自らで容易に実現できる世界としてではなく、それらとは隔たりのある世界として体験されていたと考えてみたい。これは、A氏が『それいゆ』の購読を辞めたという語りからも考えることが可能である。

A氏が『それいゆ』を読まなくなったのは昭和35年（1960）の中学三年生の頃だという。この頃になると、『それいゆ』を読むきっかけになった友人たちとは地元で会った際に話すのに留まり、中学の同級生とも雑誌を廻し読みした記憶はないそうである。『それいゆ』から距離を置いたきっかけとしてA氏は、「日本が豊かになってオシャレが誰でもできるようになった」ことに一因を見出している。小学生の頃、『それいゆ』にでていたスカートやブラウス、帽子、ハンドバッグは、A氏にとっては「高嶺の花」であった。しかし、景気が右肩上がりになるなか、洋服のオーダーもしやすくなり、周りも豊かになっていく。A氏は経済発展のさなかで、気がついたら『それいゆ』は身近になくなっていったと語る。また、オシャレをすることが現実にも可能になってきたことのほかに、話者自身の成長により、読書の方向が日本文学などに向き始めたことも理由の一つだろうと語った。

『それいゆ』を読まなくなってからも、A氏はしばらくの間、雑誌を捨てずにとっておいたそうである。しかし、結婚を機に転勤暮らしが始まり、荷物の整理を行うなかで、残念ではあったが『それいゆ』も手放したという。結婚したのは東京オリンピックの頃だそうである。

転勤暮らしは、夫の仕事の影響であるが、北海道帯広市から大阪府、熊本県や佐賀県など日本各地を転々とした。3年くらいで転勤になってしまうことが多く、自分が続けられることをしようと思ったという。また、この転勤の多さから、子どもや夫の持ち物を優先する傾向にあったそうである。A氏自身は10年程前に、子どもに「転勤したおかげで方々に友人が出来て良かった」と言われたことから、この転勤暮らしに関して前向きに捉えている。勤め先の転勤に関しては、A氏が結婚した時代においてはごく当たり前のことであり、自営業などでなく、勤め人であった人々はほとんどが転勤をしたのではないかと語った。転勤を拒否することは昇進にも大きく関わることであり、上昇志向が強かったというその時代において、夫の転勤を断念させることは、そのまま夫の昇進を止めることに繋がっていた。その頃は、男の人の仕事に対する価値観が異なっていたとA氏は語る。

A氏は、バブル期も経験している世代であるが、その時は景気が良いと

思ったくらいでバブル期であることには気付かなかったそうである。バブルを実感したのは、A氏の次男が就職活動をした頃だという。A氏の長男と次男は五つしか歳が離れていないのだが、次男が就職活動をする頃にバブルが弾け、就職氷河期に陥った。長男が就職活動をした際には、就職活動をする前から、企業側の働きかけがあり、次々と声がかかった。しかし、次男が就職活動をする頃には、立て続けに7件も面接にたどり着けないほどに難儀したという。次男が真面目な子だとA氏は認識しており、次男が就職活動を終えて、氷河期であったことを認識した。

A氏は、『それいゆ』の他にも学生時代に廻し読みで他の雑誌を読んだことがあるという。しかし、はっきり読んだことを覚えており、自身で買い求めているのは『それいゆ』のみであった。どうして『それいゆ』の記憶は残っているのか、A氏によれば、大きな要因に『それいゆ』に載っている内容が「憧れの世界」だったからだという。「オシャレでカラフルな色であんなに素敵な衣服」を求めることは、完全に不可能ではなかったが、すぐに実現できるのはほんの一握りであった。そのように、『それいゆ』で描かれる世界が夢の世界であったから、少女であったA氏にとって大切であったのだろうと語った。A氏は、『それいゆ』を読んだ後に受験や就職、結婚などを経験していく。中原のイラストのように着飾ることが「リアルな生活になっていく」以前の、「現実の世界でなくて憧れの世界」だったのだという。

以上、本章では調査によって得られた語りを示した。『それいゆ』の読書体験はA氏にとって「憧れの世界」に触れるものであったという。A氏の語りを通して、一人の少女に雑誌はどのような影響を与えたと考えられるだろうか。また、ライフストーリー法を取り入れることによって雑誌研究にどのようなことが達成できたと言えるだろうか。

## 第4章 雑誌は少女にどう読まれていたか

### (1) 雑誌における憧れと生活

前章では、実施した調査の概要と得られた語りを示した。本章では、先行

研究の蓄積および前章の調査成果をふまえて、女性雑誌『それいゆ』が当時の一読者である A 氏にどのように読まれ、どのように価値づけられていたかを整理していきたい。得られた語りからは、「憧れ」が様々な事象の要因として結びつくことが伺える。そこで、本章では当時の社会情勢と憧れ、A 氏という一少女における憧れと雑誌の關係に考察を加え、一読者は生活の中で雑誌をどう読み、どう価値づけたか明らかにする。

A 氏の語りからは、その頃の雑誌の内容が「憧れ」だったという語りが多くみられる。語りを踏まえると、この雑誌への「憧れ」には三つの位相が存在すると考えられる。

一つ目は婦人雑誌『それいゆ』という雑誌自体、ひいては中原が作り出す世界自体への憧れである。A 氏は、仲の良い友人が読んでいたことをきっかけにして『それいゆ』を手にとったという。しかし、A 氏は、雑誌を読んでみて表紙に惹かれたとも語っている。その当時人気だったという映画作品も引き合いに出され、その映画にも中原が関わっていた。これは、彼の作り出す世界に対して無意識的にもかなり憧れを抱いていたことから来ると考えられる。『緑はるかに』の同年には、東宝から『ジャンケン娘』が、翌年の昭和 31 年（1956）には、「太陽族」という流行語および社会現象を産んだ『太陽の季節』が上映された。映画史においても後世に影響を与えたものが多く上映された時代においても、中原の作り出した世界が A 氏には心に残ったということだろう。そのように考えると、A 氏の雑誌内で描かれるファッションへの関心の高さが伺える。

中原が出版した『それいゆ』は、暮らしに「夢と希望を与え美しく楽しい」雑誌を目指して作られた [中原 2011 : 13]。中原が戦後すぐに雑誌の構想を練った背景は、2 章 2 節で述べた通りである。A 氏は、自分が生活をする世界とは異なる「憧れの世界」として中原の作り出す世界を理解している。A 氏が少女であった時代は、すぐに服を買うことも厳しい時代であった。A 氏によると、ブラウス 1 枚でも、出来る人は母親が縫ってくれたという。当時は既製品の衣服がすぐに手に入る時代ではなかった。中原が作り出した世界の魅力は、現代でもショップがあったり、全国各地で企画展が開催されるな

ど、現代においても憧れとして捉えられている。美しさを提案し続けた中原の作り出す世界観が、そのまま憧れの世界だったと考えられるだろう。

二つ目の位相は、生活環境から来る憧れである。A氏は、小学校で集金を用意出来ないクラスメイトがいることを記憶していた。A氏が覚えている範囲では、その日の食べ物がなく困るということはなかったというが、学校に生活に困窮する生徒がおり、学校単位でおさぎりの仕組みが存在していた。2部授業も行われていた時代である。社会において様々なものが不足気味にあったということであろう。A氏は、『それいゆ』が贅沢品であったことも語った。A氏は、大金持ちではなかったがランドセルを百貨店で買ってもらっていたり、雑誌の定期購読をしていたりしたという。クラスメイトの話と比較すると、比較的豊かに生活をしていたことが推察される。

モノが不足していたことは、ファッション文化論が専門の田中里尚の指摘からいえる。田中によれば、中原は衣服が基本的に自前で製作されるその時代の背景を考慮して、作り替えられることを念頭に置いてデザインをしていたという [田中 2013: 96-98]。例えば、着古したワイシャツをブラッシングカバーやハンガーカバーにしたり、カーディガンにアップリケをつけることで新しい気持ちで着ることを提案している [中原 2011: 22]。

ここまで、憧れの二つの位相について触れたが、この二つは似ているようで少し異なる角度にあると筆者は考える。それは、中原の描く世界時代の憧れが現在も続いているように見え、更に現代と戦後直後では生活環境も異なるからである。中原が雑誌を通して提唱していたのは、ありようのものを工夫することで美しく飾れるということである。モノが不足しがちだった時代において、持続性は重要な要素であり、そしてそれは、現在の既製服が購入できる時代とは少し異なるものである。現在も持続性は考えられていることではあるが、A氏が少女であった頃の持続性は、資源自体が少ない中で工夫をしていた時代におけるものである。もし、二つの憧れが同じであれば、消費社会とも呼ばれる現代において、中原への憧れはなくなってしまうだろう。よって、二つの憧れは別位置に存在すると考える。

位相の違う二つの憧れであるが、この二つが組み合わさることによって、

三つ目の憧れの位相に繋がる。中原の世界に憧れた A 氏が少女であった頃、衣服は自前で用意する時代であった。中原の雑誌においても「それいゆぱたん」のように、スタイルを描くページがあったり、雑誌に掲載されているスカートやブラウスの型紙がついていたりした。A 氏も母親に衣服を作って貰っている。このように「憧れ」の世界を自身の力で実現することも出来たのである。雑誌というメディアが少女に憧れを提供したことは、神野由紀も指摘している〔神野 2012：30〕。雑誌は、戦後の少女たちに憧れを提供する役割も持っていたのである。

そして、これはあくまで推論であるが、A 氏が少女雑誌ではなく婦人雑誌を購読していたことにも「憧れ」の希求が読み取れるのではないだろうか。A 氏は小学生から中学生にかけて他の雑誌も読んだそうであるが、何を読んだのか詳細には覚えていないと語った。少女時代に読んだ雑誌の中で『それいゆ』のみが唯一 A 氏の印象に深く残ったのである。少女時代に定期購読をした雑誌も、『それいゆ』のみだという。A 氏が少女時代に婦人雑誌を読んでいたのは、かなり特殊な例に感じるかもしれない。しかし、購読のきっかけに同年代の存在があり、A 氏の生活に限っていえばとりわけ特別なことはなかったといえよう。この語りからは、背伸びをして『それいゆ』を読むことが A 氏のための嗜好ではなく、周囲の友人と共有されていたことがみえてくる。少女たちにとって、婦人雑誌『それいゆ』は少女向けに作られた『ひまわり』及び『ジュニアそれいゆ』よりも強烈な憧れの対象として体験されていたとも考えられる。

雑誌が二つの位相により「憧れ」を提供するものだったと考えると、A 氏が雑誌を読まなくなったきっかけもまた、憧れが関係していたと考えられる。A 氏は「日本が豊かになってオシャレが誰でもできるようになった」という。豊かさが増し、今までの憧れや理想が現実になづくことにより、A 氏の身の回りから、婦人雑誌『それいゆ』はなくなっていったのではないだろうか。時代こそ異なるが、香山リカは雑誌『Olive』が少女たちに支持される理由に、雑誌『Olive』において登場するオリブ少女がコンセプトualで自身に当てはまるように思えつつも、達成しきれなかったからこそ、多数の少女

に指示されたことを指摘している〔香山 1991：112-116〕。

三つ目の位相は、記憶の持続性に関わる憧れである。A氏は、少女時代に『それいゆ』に抱いた憧れを記憶が残っている理由としても考え、その大きな要因に掲載内容が夢の世界であったからだという。定期購読をし、母親に服を作ってもらうほど焦がれた憧れが、今回調査において『それいゆ』に関して話を伺えた理由なのではないだろうか。

本節では、調査で得られたA氏の語りを通して、首都圏で生活する一少女がどのような生活のなかで雑誌を読んでいたかを三つの憧れの位相から考察した。話者は、豊かになる社会状況とともに貧困や社会の厳しさの存在についても認識していた。そのような生活のなかで繰り広げられた洋服の流行は大きな関心事であり、また、色とりどりの衣服が描かれる『それいゆ』は憧れの世界であった。生活のなかで強く渴望されていた衣服は、社会が豊かになり、現実と雑誌の内容が近づくと話者の周囲から遠いものへと変わっていった。しかしながら、少女時代に感じたという憧れは、話者の記憶に良い時代の一エピソードとして記憶されたといえる。

ここまで、雑誌読者への聞書きを示してきた。雑誌研究においてあまり取り上げられてこなかったこの手法を採用することによって、どのようなことが明らかにできただろうか。次節では、少女雑誌および婦人雑誌研究における聞書きの可能性について考察を加えたい。

## （２）雑誌研究における聞書きの有用性

前節では、得られた聞書きからA氏の生活および人生に『それいゆ』がどのように経験されてきたか考察を加えた。A氏のなかで、『それいゆ』は憧れそのものであり、身の回りにモノが溢れてくると『それいゆ』から距離を置いたことが明らかとなった。また、自身が少女の頃に抱いた「憧れ」が『それいゆ』を定期購読していたことを覚えている理由としても捉えていた。本節では、一読者の事例を通して、雑誌研究において聞書きを行い、生活と雑誌の関わりを記すことが研究史のうえでどのような意味を持つのか考察する。

本稿は1人の話者のライフストーリーから導きだした試論である。投稿など



積極的な雑誌への介入をせずとも、生活、とくに衣服のうえで雑誌と読者の関係には大きな関連があったことが判明した。A 氏の場合、雑誌の憧れによってそれらの活動が起きたと考えられる。雑誌の内容への憧れは、雑誌がどう読まれていたのかを解き明かす際に重要なキーワードとなるのではないだろうか。

また、雑誌投稿欄を対象にした研究は、その時代の享受層の性質や活動などを読み解く有効な方法として認識されていた。投稿者の属性は、雑誌に記されていることから読み取ることが可能である。しかし、属性を偽っていることも十分に考えられる。佐藤（佐久間）の指摘にもあるように、少女雑誌の投稿欄において対象とされる少女以外の投稿者の存在や剽窃、他の雑誌との重複した投稿を排除する傾向がある〔佐藤（佐久間）1996：122-125〕。また、『少女の友』の編集者を務めた渋谷青花は、誌上において男子と思われる人物が投稿した「佐治君子事件」<sup>7)</sup>について触れている。渋谷ら、『少女の友』編集部は、佐治君子の正体を把握するために佐治君子が雑誌を買っていたであろう本屋に問い合わせたという〔渋谷 1981：103-104〕。誌上における読者の属性の偽りの可能性を、編集部側も認識していたことが分かる。このような例からは、雑誌が対象として設定したターゲット層以外の読者が、雑誌上で阻害され、またそのために読者投稿欄を分析する研究においても阻害、あるいは研究の枠組みに入りにくかった可能性が考えられる。本稿で取り上げた事例は、主に学校卒業後の未婚の女性たちや専業主婦を対象にした婦人誌を定期購読していた女子学生、つまり少女雑誌が想定するターゲット層に入りながら婦人誌を購読していた一例である。また、話者は投稿に関しては興味がなく、あくまで雑誌を購読することに関心があった。読者に聞書きを行うことによって、雑誌が読者として設定したターゲット層以外の階級や属性を持つ読者、また積極的に雑誌に働きかけない「読み物」として雑誌を愛読していた読者にまで研究の枠組みを拡大することが出来る。

読者の枠組みに雑誌の対象とされる層以外の読者を入れることに違和感を感じるかもしれない。しかし、特定の読者層を対象にしたものをそれ以外の層が読んだことについて、作品の与える影響の度合いを示す根拠として提示されることがある。例えば、少女まんがにおける「花の24年組」と呼ばれる



萩尾望都や竹宮恵子らの作品は、男性にも受け入れられたことが少女まんがの歴史のうえで重要なこととされ評価されている。

少女雑誌の草創期である明治後半および、A氏が少女であった時代の少女雑誌は社会階層の高い人びとをターゲットとして作成されたものであり、金銭的余裕を有した社会階層の人びとでないと手が届かないものと考えられている。今回取り上げたA氏も、東京都に住み、昭和の高度経済成長期に大学に通うなど、ある程度の社会階層の高さが推察できる。しかしながら、公立の小学校に通っていたA氏は自身の身の回りに社会の貧しさ・厳しさがあることを認識してもいた。また、同級生との雑誌の貸し借りによって雑誌が購入者以外の手にも流通していることが明らかとなった。児童文学作家のエム・ナマエこと生江雅則は、幼少期に姉が所持していた『赤毛のアン』が、自身の人生に影響を及ぼしたという〔エム 1980: 54-56〕。生江の例などは、購入者以外にも雑誌や書籍が人に影響を及ぼしていた一例として捉えることが出来る。このように、ターゲット層以外の階層や身分、立場の人物であって、それを購入しなかった層も、読者として捉え得る可能性がある。

また、本稿で取り扱ったA氏の事例からは、雑誌から距離を置いたあとの経験に対する自身の評価づけを記すことが出来た。今回選択したライフストーリー法のように、聞ききという手法を雑誌研究に取り入れることで、読者層の幅を広げ、更に雑誌が個人に与える経験についても考察できるようになるであろう。

## おわりに

本論文では、雑誌がどのように読まれていたかという関心を基に、『それいゆ』読者のA氏のライフストーリーから雑誌の読まれ方を考察した。A氏の語りからは、戦後、バブル期を迎える時代を暮らしていた少女が中原淳一の絵を通して、憧れを消費していたという当時の雑誌の一読まれ方が明らかとなった。モノが豊かになる時代、憧れは少女の読書経験だけでなく他の要素にも大きく働いていたと考えられる。今回、雑誌における憧れについて、首都圏で生活していたA氏の例をあげた。しかし、憧れには地方や経済状態、

またジェンダーといった複数の交差性も考えられる。「金の卵」と呼ばれ集団上京する地方の子どもたちには都会への憧れが、少年漫画を読み登場人物に自身を投影する少年には少年の憧れが、存在することがあるだろう。その点の検討は今後の課題といえようが、雑誌研究における聞書きには、有用性があると考えられるだろう。

## 脚注

- 1) 中原淳一（1913～1983）は、昭和初期に少女雑誌『少女の友』で活躍した挿絵画家である。挿絵画家は、今でいうイラストレーターのようなもので、小説や表紙のイラストを担当した。中原は、『少女の友』の挿絵のみならず、付録なども手掛け幅広い活躍をした。
- 2) 「消極的な形で主体性」とは、本田の「少女幻想共同体」が雑誌間での自閉的な関わりにとどまることを指し示すために佐藤（佐久間）が使用した言葉をさす〔佐藤（佐久間）1996：116〕。
- 3) 例えば、創刊 100 周年を記念した『「少女の友」創刊 100 周年記念号明治・大正・昭和ベストセクション』における「友ちゃん同窓会」や、があげられる〔遠藤・内田 2009：278-282；内田 2011：118-131〕。
- 4) 「夢の花」とは、『少女の友』の読者と編集部、また読者同士の交流の場である「友ちゃん会」で歌われていたという歌〔遠藤・内田 2009：278-282〕。
- 5) 浅丘ルリ子（1940～）は、1960 年代の日活黄金期に特に活躍した女優である。「緑はるかに」は、浅丘のデビュー作でもあり、彼女の幼少期の風貌は「淳一の絵にそっくり」〔やなせ 2013：49〕であり、彼女をオーディションで発掘したのも中原であった〔林 2013：56〕。
- 6) 『別冊太陽日本のこころ 238 号 中原淳一のジュニアそれいゆ』にはその頃の記事が写真つきで転載されている〔別冊太陽編集部 2018：72-73〕。
- 7) 「佐治君子事件」とは、明治 42 年（1909）の『少女の友』2 月号において、佐治君子の投稿が剽窃であったことが指摘され起こった事件。剽窃が指摘されると、佐治君子の母親を名乗る人物から遺書が届いたという〔渋沢 1981：103〕。

## 参考文献

朝日新聞 1936 年 12 月 25 日号

井上雅人

2010「洋裁文化の構造—戦後期日本のファッションと、その場・行為者・メディア（1）」『京都精華大学紀要』37：23-42

井上雅人

2011「洋裁文化の構造—戦後期日本のファッションと、その場・行為者・メディア（2）」『京都

精華大学紀要』38：3-22

井上雅人

2013「中原淳一と少女たちのメディア—少女雑誌からファッション雑誌へ—」『ユリイカ』11：86-93

今田絵里香

2002「少女雑誌における『少女ネットワーク』の成立と解体—1931～1945年の少女雑誌投稿欄分析を中心に—」『教育社会学研究』70：185-202

今田絵里香

2007『「少女」の社会史』勁草書房

岩下朋世

2013「スタイル画と様式 抒情画的な少女マンガへ」『ユリイカ』11：195-202

内田静枝

2011『中原淳一 少女雑誌「ひまわり」の時代』河出書房

枝木妙子

2019「非常服としてのモンペの〈流行〉：第二次世界大戦期の新聞や婦人雑誌の記事に着目して」『アート・リサーチ』19：15-24

エム・ナマエ

1980「男子諸君よ、夢見る乙女の心を持て」『日本児童文学』26（2）：54-56

遠藤寛子・内田静枝編集

2009『「少女の友」創刊100周年記念号 明治・大正・昭和ベストセクション』実業之日本社

大塚英志

1989『少女民俗学』光文社

表真美

2006「明治期婦人雑誌、総合雑誌における『食卓での家族団らん』」『日本家政学会』57（6）：369-378

香山リカ

1991「オリーブ少女の欲望のありか」『少女雑誌論』東京書籍

川村邦光

1993『オトメの祈り—近代女性イメージの誕生—』紀伊國屋書店

菊田琢也

2013「雑誌『オリーブ』にみる少女像の形成と共有：読者投稿ページの分析を中心に」『文化学園大学紀要、服装学・造形学研究』44：75-84

木村涼子

2021「昭和初期の女子教育とマスメディア：関西圏の高等学校・女子専門学校卒業生へのイン

タビューより」『大阪教育学年報』(26)：63-74

小林多寿子

1995「インタビューからライフヒストリーへ」中野卓・桜井厚編集『ライフヒストリーの社会学』  
弘文堂

小山有子

2013「きものと中原淳一 JUNICHI KIMONO で愉しく・新しく」『ユリイカ』11：104-110

小出治都子

2011「少女雑誌から見る化粧品広告：『少女の友』と中山太陽堂」『デザイン理論』57：122-123

嵯峨景子

2011「『女学世界』にみる読者共同体の成立過程とその変容<sup>®</sup>—大正期における「ロマンティック」な共同体の生成と衰退を中心に」『情報学研究』78：129-147

桜井厚

2012『ライフストーリー論』弘文堂

笹本真寿美

1987「婦人雑誌にみる近代日本の女性たち：一九二〇年代の婦人文化状況試論」『フォーラム』5：  
74-86

佐藤（佐久間）りか

1996「『清き誌上でご交際を』—明治末期少女雑誌投稿欄に見る読者共同体の研究」『女性学』4：  
114-141

四方由美

2007「戦時下・占領下の婦人雑誌の読者—聞き取り調査によるジェンダー史の試み」『白山社会学研究』(14)：1-11

渋沢青花

1981『大正の『日本少年』と『少女の友』』千人社

島根県立岩見美術館・国立新美術館編集

2021『ファッションインジャパン 1945-2020 流行と社会』青幻舎

神野由紀

2012「表象としての少女文化：「カワイイ」デザインの起源に関する一考察」『デザイン学研究特集号』19（4）：28-35

田中卓也

2013「近代少女雑誌『少女界』の読者に関する研究—投書欄『女子談話会』の投書を中心に」『越谷保育専門学校研究紀要』(2)：10-17

田中卓也

2020「戦後日本の少女雑誌における『愛読者大会』における一考察」『中国四国教育学会 教育

学研究紀要』66（1）：49-54

田辺聖子

1981『欲しがりません勝つまでは：私の終戦まで』新潮社

谷岡輝樂々

2018「中原淳一の「少女らしい」ファッション」京都市立芸術大学 美術学部 総合芸術学学位  
卒業論文 <https://sougei.kyogei-ob.jp/sogewp/wp/wp-content/uploads/2019/02/2018Tanioka.pdf> (2021年10月15日最終閲覧)

中原淳一・ひまわりや

2011『新装版 中原淳一画集』講談社

中村圭子

2012『日本の「かわいい」図鑑 ファンシーグッズの100年』河出書房新社

林静一・中村佑介

2013「対談 大きな瞳が見つめる先に 浮世絵、夢二から少女マンガまで」『ユリイカ』11：52-64

福田里香

2013「中原淳一が描く二次元フードの魅力」『ユリイカ』11：127-131

藤本純子

2005「戦後期少女メディアにみる読者観の変容—少女小説における「男女交際」テーマの登場を手がかりに」『出版研究』36：75-93

別冊太陽編集部

2016『別冊太陽 中原淳一のそれいゆ』238 平凡社

別冊太陽編集部

2017『別冊太陽 中原淳一のひまわり』249 平凡社

別冊太陽編集部

2018『別冊太陽 中原淳一のジュニアそれいゆ 十代のひとの美しい心と暮らしを育てる』平凡社

本田和子

1982『異文化としての子ども』紀伊國屋書店

本田和子

1990『女学生の系譜・増補版 彩色される明治』青弓社

増渕宗一

1987『リカちゃんの少女フシギ学』新潮社

やなせたかし

2013「不滅の大芸術家、中原淳一」『ユリイカ』11月号

米澤泉

2014『「女子」の誕生』勁草書房